Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-28

どこまで回復できるか? : 再生医療の持つ新しい可能性（インフォメーション : 大倉山祭 医療シンポジウム）

土井, 健史

(Citation)
神戸大学医学部神緑会学術誌, 22:81-82

(Issue Date)
2006-08

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81007928

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81007928

インフォメーション――大倉山祭　医療シンポジウム

どこまで回復できるか？～再生医療の持つ新しい可能性～

2005年度神戸大学医学部大倉山祭医療シンポジウム実行委員長
土　井　健　史（医学科４回生）

はじめに

大倉山祭医療シンポジウムは大倉山祭を代表する行事として，広く一般の方々に医学的な知識に触れて頂き，より良い生活を送る上での手助けになればと考え毎年開催しているものです．2005年は「どこまで回復できるか？～再生医療の持つ新しい可能性～」ということで，最先端医療と言われている再生医療をテーマに取り上げ，今回のシンポジウムを行いました．実行委員で何度も話し合い，友人・知人に話を聞いたりした結果，最先端医療とはどのようなことがなされているのかとても興味がある，という回答が得られました．再生医療は最近テレビなどで取り上げられることもありますが，やはり一般の方々や我々にもあまり馴染みがなく，そしてよく知らない医療です．しかし，近い将来必ず実現される夢の医療であると我々は感じたので，ぜひそれを一般の方々にも知ってもらおうと思い，再生医療を今回のシンポジウムのテーマに取り上げました．

学生発表

再生医学は最近になって誕生した分野ですが，その再生医学の確立には特に，外科学の発展やそれに関わる麻酔法や滅菌消毒法の誕生，さらには工学の発達が重要な役割を担っていると考えられます．

麻酔を使うことにより，痛みを消すことができ，それにより患者さんの負担も大きく減らすことが可能となりました．また，滅菌法・消毒法が誕生することで，術者・患者双方への細菌感染を防止することが可能となりました．近代になって確立したこれらの技術のおかげで，体を切り開き体内の臓器すらも治療の対象とできるようになったのが，近代外科学の大きな発展と言えます．さらに，工学の発達でCT・MRI・内視鏡などといった機器が現代の外科技術に大きく貢献しています．しかし，病変部位を「取り除く」ことを主に行う外科治療だけでは限界があります．そこで誕生したのが，無くなった組織を「新たに造る」という考えに



「再生医学・その夢と現実」の講演をしていただいた浅原孝之先生

基づいた再生医学です．そして，その再生医学を治療に応用したものが再生医療なのです．

再生医療の基本となっているのが「不足分を補う」という考え方です．そういった考えから言うと，輸血・人工臓器・臓器移植なども再生医療に含まれるでしょう．しかし，これらの技術は非自己である異物を体内に入れる治療なので，拒絶反応という難しい課題が残りますし，臓器移植ではドナー不足という大きな問題もあります．再生医学は「自己の再生能力を十分に生かして生体の損傷を治そうという治療概念」と定義されており，その人の持つ細胞（主に，最近話題となっているES細胞やその他の幹細胞）から必要な組織を作り出し，それを移植できればそれが再生医療の究極と言えるでしょう．例えば変形性膝関節症における関節軟骨の再生や，パーキンソン病における神経細胞の再生などに応用できると考えられているのですが，幹細胞を用いた再生医療は現実にまだ臨床応用されているわけではありません．しかし，その可能性はゼロではなく，近い将来実現されるでしょう．

そして，今回のシンポジウムではこのような再生医療がどのようなものであるかについて，東海大学生理学教室教授，先端医療センター再生医療研究部部長，理化学研究所発生・再生科学総合研究センター幹細胞医療応用研究チームチームリーダー　浅原孝之先生．そして実際に再生医療がどう臨床応用されているのかについて，神戸大学医学部附属病院形成外科助教授寺師浩人先生にご講演をいただきました．

シンポジウムを終えてアンケート結果から

当日行なったアンケート結果から，今回のシンポジウムには20代から70代，さらにはそれ以上の方という幅広い年齢層の方々にご来場いただいたことが分かりました．職業も学生・主婦・医療関係者・会社員など様々でした．その中でも特に20代の学生の方に多数ご来場いただいたことがわかり，若い年齢層の方々にも興味を持ってもらえたテーマであったと思います．参加理由も「再生医療に興味がある」「医学について新しいことが知りたい」といったものが多く，最先端医療に多少なりとも関心がある方々が来られたようです．

また，シンポジウムについての感想や再生医療についてどう思うかについても伺いましたが，「専門的な内容ではあったが，最先端医療についてよくわかった」「難しいテーマにもかかわらず，素人にもわかりやすい丁寧な講演だったのでよかった」といった感想が多く，そしてご来場いただいたほぼすべての方に再生医療についてよくわかったと回答していただきました．ただ，実際に再生医療を自分が受けるとなると不安を感じる方も多かったという意見もあり，「治療を受けたあとの合併症などが不安」「再生医療を行った際の拒絶反応が心配」との回答も得られたので，これらの点は我々のみならず医療に携わるすべての者に対する課題と言えるかもしれません．

医学生の立場から

我々は普段学校の授業で病気のメカニズムやその治療法などすでに知られていること，主に行われている治療などを重点的に学んでいます．しかし，最先端医療など実際にはまだ行われていないことについてはあまり授業で学ぶことがありません．そのため，再生医療について勉強していくうちに，最先端医療の可能性にとても興味が湧いたとともに，将来我々が医師となった時にはこのようにきっと行えるだろうと実感しました．

我々は立派な医師になるべく必死で医学の勉強をしていかねばなりませんが，今回のシンポジウムで学んだことを忘れることなく，今後とも精進していこうと思います．

最後になりましたが，大変興味深く，また一般の方々にもわかりやすい素晴らしいご講演をして頂きました浅原孝之先生，寺師浩人先生の両先生方に学生を代表致しまして厚く御礼申し上げます．また，当シンポジウム開催にあたり，ご協力下さいました総ての方々にこの場を借りて御礼申し上げます．